
PARTY EVERYDAY

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

PARTY EVERYDAY

【Nコード】

N9571M

【作者名】

坂田火魯志

【あらすじ】

戦争がはじまった。戦場での俺達は。チェッカーズシリーズ第五十二弾、風刺色の強い曲でした。

第一章

PARTY EVER

YDAY

「さあ、はじめるか」

「ああ、今からな」

「派手にな」

まずはそれからだった。俺達にはやりと笑って言い合う。

それから武器を取って国境に向かってだ。一気に攻撃をはじめた。

「撃て撃て！」

「どんどんやれ！」

「遠慮するな！」

こう言い合ってた。派手に小銃やマシンガンを撃ちまくる。

後ろから戦車が来た。敵からもだ。

「おい、タンクが来たぞ！」

「潰せ！」

「バズーカ撃て！」

一人がバズーカを撃ってそれで吹き飛ばす。けれど敵の戦車はまだまた来る。

一両潰してもまた一両来る。すぐに数え切れないだけの数が来た。
「多いな」

「安心しろ。ヘリが来るぜ」

仲間の一人が言ってきた。皆迷彩服にヘルメットだ。何か一見するとピエロにも見える。ガキの頃はピエロよりも憧れていた服装だ。俺達は今それを着ている。

その格好で銃を持って敵をやつつける。まさに俺達がガキの頃夢見ていたことだ。

敵はひっきりなしに来るしそれをやつつけて。何か向こうもそんな顔に見える。

「ちっ、向こうもしぶといな」

「お互い国がかかってるからな。それもそうだろうな」
「だからか」

「そうなんだろうな」

こう言い合いながら攻撃を繰り返した。何とか堪えていると上から爆音が来た。そうしてそこにやって来たのはだった。

「来たな」

「ああ、強力な助っ人のな」

ヘリが編隊で来てくれて攻撃をしてくれる。これでこっちの流れになった。

ヘリは機関砲にロケットを敵の戦車に次々と叩き込んでくれる。

これでその数はかなり減ってくれた。やっぱり戦車にはヘリだった。こっちがやりたい放題やっているとだった。敵もそのヘリを持って来た。

「敵もかよ」

「持って来たか」

「こっちは対空砲来たぜ」

戦車の車体に機関砲を左右に付けた砲塔を乗せたそれが来て敵のヘリに攻撃を仕掛ける。見たら向こうも同じものを出してきた。

それで撃墜されたお互いのヘリが火を噴いて落ちて行く。地面に叩き付けられるとそれで爆発する。

その繰り返しで一日終わった。夜俺達はテントを作ってからそこでバーベキューだった。

「おい、それ俺の肉だぞ」

「俺のだよ」

肉の一切れで取り合いをした。

「その牛肉はな」

「だから俺のだって言ってるだろ」

「おい、待てよ」

ここでまた一人参戦する。

「それ俺が焼いてた肉だぞ」

「そんなの何時決めたんだよ」

「初耳だぞ」

取り合いをしていた奴等がそいつに抗議をはじめた。二人で共同戦線になった。

「俺が焼いてたんだぞ」

「だから俺だつて言ってるだろ」

こんな三人の取り合いの中でこれまた別の奴が取ってそれで取っ組み合いになって。拳句に鬼軍曹が来て怒鳴りつけてきた。

第二章

「肉の一切れ位でがたがた騒ぐな！」

「けれどですね」

「こいつがですね」

「けれどもこいつもない」

これは鬼軍曹が正論だった。そのおっかない人がだ。

「肉なら他にもたっぷりあるだろうが」

「ええ、そうですね」

「それは」

「わかつたら食え」

そう言つて軍曹自ら肉を焼きはじめた。そうしてそれをまた食べるのだつた。

そのバーベキューとビールで夕食にした。それからテントの中で寝た。

次の日の朝起きると今度は前線にロボットが出ていた。やけに俺達に似せた銀色の機械の奴等だ。そのロボット達を見て思ったことは。

「なあ、あいつ等」

「何だ？」

「どうしたってんだ？」

「あのロボット俺達に似てないか？」

「こつ言つた。思つたままだ。」

「俺達に何かよ」

「そうか。只のロボットじゃないか」

「だよな」

けれど他の奴等はどう言つただけだった。

「どう見てもな」

「あんなのな」

「そうか？結構似てると思うんだけどな」

俺はまだそのロボットを見ながら首を捻った。

「俺達の方のロボット達もな」

「それはそうとしてだよ」

「あの連中が来たからにはな」

「ああ」

話は戦争に戻った。そうしてだった。

「バズーカだな」

「それで吹き飛ばそうぜ」

「向こうもバズーカ出してきたしな」

敵の兵隊達もだった。俺達がバズーカを出してきたのと同じだった。

それで俺達がロボットにバズーカをぶっ放つと向こうもだった。

それでロボット達を倒す。俺達も向こうもそうしてロボット達を蹴散らした。

ロボット達が消えると今度は塹壕に入って向かい合った。その日はそれから戦車を出してもヘリや飛行機を出してもだった。睨み合っただけだった。

そのまま睨み合って一日が終わってまた肉の取り合いだった。

「だからそれは俺のだよ」

「俺のだってんだろ」

「いいや、俺のだ」

昨日と同じだった。そしてその次の日。俺達のところにとんでもないニュースが入って来た。

「えっ、あの国がですか」

「あの国もですか」

「ああ、来たぞ」

将校がこう俺達に言ってきた。何と別の国が俺達の戦争に介入してきたのだ。しかも俺達の国も向こうの国も両方相手にするということだ。

「これで三つ巴だ」

「何かややこしくなりましたね」

「三つもって」

「しかも国連も介入するそうだし」

今度は国連もだった。あの五つの国が威張り散らしてやりたい放題やっている場所だ。俺達にとっちゃそうした迷惑な存在でしかない。

「あと別個に太平洋やらEUやらも介入を検討中らしい」

「何か何処もかしこもですね」

「無茶苦茶になってきましたね」

「派手なパーティーになったな」

将校は笑いながら言った。

「どいつもこいつも介入してな。賑やかになってきたな」

「ですね。本当に」

「誰も彼もなんて」

それでも前線にいる。だとすればすることは一つしかなかった。俺達は銃を取ってそれで戦う。戦いは派手になるばかりだった。その派手な戦いから何がどうなるのか俺達にはわからない。けれどパーティーはまだまだ続くことだけはわかっていた。

PARTY EVERYDAY 完

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9571m/>

PARTY EVERYDAY

2010年10月8日13時44分発行